

## 大学院特別講義

演題<精神科臨床において「未熟な」とはどんな感じのことか？>

講師：本村春彦 先生

川添記念病院精神科医長

平成 25 年 10 月 25 日(金)

講演要旨；「未熟な」という言葉自体はネガティブな文脈で使われることが多く、精神科領域でも処遇が大変なイメージを持ちやすい。しかし、一方では「未熟な」という言葉には、「今から育つ」というポジティブな側面も含まれているように思われる。症状は華々しくても、時間をかけて落ち着いていく症例を通して、「未熟なひと」とはどんな感じなのかを少しでも想像してもらうのが目的である。



「未熟な」人が増えている、という話を 6 年前に本村先生に伺って以来、ずっと引っかかっていた。今回、「未熟な」をキーワードに、社会と人の成長、「未熟」であることが疾患の病像に関係することがあるという問題を具体的な例を基にお話して頂きました。

「未熟」というと、「すぐ身体化する」、過食や嘔吐、リストカットや過量服薬

などの自殺企図など、大変な患者さんをイメージしがちです。

そもそも社会の変化により、いろいろ便利になった分、技術的に未熟になりやすい。また多様性が許容されるようになった分、精神的に未熟な人が増えた、など

社会的要因+個人的要因（素質+養育環境）

によって、「これくらいのことで、こんなことするの？」とびっくりするくらい「子供っぽい」人が増えました。

その中でも「見どころがある人」か「悪い人」か、「イヤな人」か「知的能力に問題がある人」か、で対応が変わってきます。またその家族の理解・協力がどの程度得られるかも介入の仕方に影響します。

社会の変化で、現代は情報量の増大と価値観の多様性から不安と苦悩と責任が増大しています。ここで、否認しつつも現実と折り合いをつけようとしたり、あるいは解離退行してしまう人もいます。

このような患者さんには保護しながら成長を待つこと、ほめて育てるなど本人の経験値を上げていくことが治療的となります。未熟なりに逃げずに一生懸命自力で生きようとする人は、「変わっていける」感じがあり、「見どころがある」と言えます。一方、法に触れることも平気なような「悪い人」や、つらい現実に向き合わない（否認）で、追い込まれると他人のせいにして（他罰）逃げようとする「ずるい人」は育ちにくいようです。

とかく、口の症状だけにとらわれがちな我々ですが、より深い人間理解のもとに患者さんとの接し方を工夫する必要があると改めて感じ入った講義でした。



講義終了後に美味しいフレンチに舌鼓を打ちながら、楽しく議論しました。